

「タイプライター」

野瀬 隆平

「きみきみ、二枚目に穴をあけてどうする。それが役所に出す正ではないか」
「だけど、一番上の見やすいのが正で、それをお役所に出すのではないのですか。英文タイプの場合はそうでしょう」

この時期になると思い出す。同期に入社した仲間と一緒に研修を終えたあと配属先で、いよいよ実務を通して仕事を憶えることになる。就職したのが重工業のメーカーだったので、最初の職場は自社の製品をよく知る意味もあり、工場の営業部門だった。

冒頭のやり取りは、英文の手紙を書いたり関係官庁に提出する書類を作るのも仕事の一つであった職場でのことである。

今から60年も前のことである。まだパソコンはおろかワープロといった便利なものはない。もっぱら活躍していたのはタイプライターだった。複数のコピーが必要なときに、用紙の間に何枚ものカーボン紙を入れて打つ。一文字でも打ち間違えたら、修正は大変な作業だ。

英文の手紙は一枚目が正で、これにしかるべき上司のサインをもらって発送する。しかし、和文の場合には二枚目が正だというのである。

英文のタイプライターと違って、和文のタイプライターは各部門には置いていない。何千という活字の中から一字ずつ拾い出して打って行く、誠に根気のある仕事だ。そこで、総務の中にタイプ室があって、何人かの女性が一手に引き受けて黙々と作業をしている。なぜか年配の人が多く、息抜きが必要な彼女たちにとって、男性の新入社員は格好の気晴らしの対象である。今日ではセクハラとも云えるような言葉が飛んでくる。それに耐えながら、低姿勢でお願いするのである。

一度苦労して打った同じ書類を、こちらのミスでまた打ってもらわなくてはならない。これは、大変なことだ。あの「おばさま」に平身低頭、ひたすらお願いするしかない。

今度は、からかいだけでは済まない。嫌味の一つも云いたくなるだろう。それが分るだけに、重い足を引きずってタイプ室に向かった。